

パフォーマンスティヴィティ：教育研究の一焦点として

報告者 センター客員教授（ベルリン自由大学教授） クリストフ・ヴルフ

〈クリストフ・ヴルフ先生の紹介〉

1944年ベルリン生まれ。マールブルク大学で学位および教授資格を取得。ジーゲン大学を経て、1980年よりベルリン自由大学教授。「人間学と教育」講座担当。同大学附属歴史的人間学・学際研究センター併任教授。著書に『教育科学の理論と概念』『ミメーシス』『遊び・儀礼・身振り』など多数、邦訳書として『教育人間学入門』（玉川大学出版部、2001年）がある。「ミメーシス」の概念を核として教育人間学の再構築を進めるほか、ドイツ学術振興会の重点プロジェクト「遂行的なものの文化」（Kulturen des Performativen）の「儀礼と儀礼化における社会的なものの生成」の部門を主催。家庭・学校・若者文化・メディアにおける参与観察を組織している。（文責：今井康雄）

はじめに

この稿の目的は、教育研究の新しい焦点を一つ紹介することにあります。これについてですが、あらゆる革新的新機軸について真実であることがここでも関連をもってきます。すなわち革新的とは云っても、よく見ると特に新しいと言う程のものでは無いということです。殆どの場合、そうした新機軸は実際に登場するかなり前から既に登場が予告・期待され、試行錯誤が繰り返されているものなのです。これはここで提案するパフォーマンスティヴィティへ焦点を合わせてみることに、についても当てはまります。このパラダイム・シフトについては、予告されてからかなり久しい。これの雛形については人文系・社会科学系領域の幾つかに存在しており、社会を質的に研究する分野においては既に一つの挑戦状を突き付ける程になっています。ではここでのパフォーマンスティヴィティ関連の議論で問われているのは一体何なのでしょう？パフォーマンスティヴィティ方向へ進むということはどういうことなのでしょう？

最初に言えることですが、パフォーマンスティヴィティ研究では教育的現実を扱うに当たって、まず解釈学的理解から始めたりしないということです。もっとも、この種のアプローチもある教育状況とその文化的特性の歴史性を明らかにするという限りでは大切となるでしょう。さらにこのアプローチの狙いは、教育的行為を理解と解釈学的反芻の対象とすることにあります。シュライエルマッハーは文面を理解するための科学としてだけで解釈学を発展させたのではありません。彼の著作を見ますと、シュライエルマッハーは教育状況と教育的行為を理解するために解釈学的手法を用いております。それ以降、文章を注意深く読むような形で教育的文脈が読まれ理解

されていくようになりました。ある教育状況を理解することに存する主観性がその有効性を相対化する範囲、というものにシュライエルマッハーはとても意識的でした。その後ディルタイがこうした考えを取り上げ、社会状況を説明するのみならず歴史的再構築や解釈が必要な人文学のために解釈学のシステムを発展させました。

民俗誌研究ではこの社会的現実の文章構造という概念が大いに使われてきました。実際、ヴィクター・ターナーとクリフォード・ギアーツはヴィルヘルム・ディルタイについてははっきりと触れています。このように民俗誌研究では、調査の対象である社会状況をよりうまく理解しようとして解釈学的方法を発展させた中で、こうした学恩が他の事々と共に明らかになっています。そしてパフォーマンスティヴィティ性に関する教育科学研究について言うならば、これにも民族誌学的手法が含まれておりますが、私が今述べたアプローチ、すなわち教育状況を文章として読みかつ理解しようというアプローチと共通性がある、と強調してよいでしょう。

しかし、パフォーマンスティヴィティ研究は行為に集中的関心を向けるという点において、解釈学的分析とは異なります。ここで行為という言葉が意味するものは、行動主義でいうところの単なる行いよりも広いものです。私たちが関心をもっているのは、社会的行為がいかに展開してゆくのか、いかに演ぜられもしくは設定されるのか、その裏にどのような行為のパターンが潜んでいるのか、といったことを明らかにすることです。行為というのはどのようにして遂行され、またその行為を性格付ける制度的・個別的的条件とは何なのでしょう？教育科学研究は子ども、親、教師、その他教育専門家の行為を研究することに向けられています。

ここで使われているパフォーマンスという言葉ですが、オースティンが一つの行為にある具体的「パフォーマンス」性を指すために使った用法へと辿るものです。そしてこの言葉は、主として演技の動作的な面を強調する演劇的概念でのパフォーマンスにも関連しています。ここでは、前もって用意された文章は必要ありません。パフォーマンスはよく文章の代わりに、あらかじめデザインされ稽古された肉体的動作や形態やその連続的活用に基づいて置かれています。また、パフォーマンスの概念はジェンダーについての議論でも重要な役割を果たしています。例えばジュディス・バトラーはセックスとジェンダーを区別し、ジェンダーに基づく行為という概念、ならびにジェンダーとは特定の動作や話しぶりに由来するもので、それゆえに社会権力の問題と密接に関わってくる、という考えを打ち出しました。最後にこのパフォーマンスという概念は、株式市場の文脈であるとか、株価の上下が企業や社員の業績を反映しているとされる経済界の論議にも関連してくるものです。

オースティンは、発語内行為の談話中では何事かが為されるのに行為が発話をもって遂行されること、そして発語媒介行為の談話中では何かが発話されたその結果、何事かが為されることを論証しました(例：フランス、これがあなたの洗礼名です)。ターナーとシェックナーは儀式についての研究にて、ある儀式に特定の性格を定義づけるものは儀式を司る者達の身体的パフォーマンスと関係がある、と示しました。儀式におけるその他の要素は、全てこの面に端を発するとのことでした。

儀式を通しての社会形成

それではこれから、私たちが手がけている『儀式を通しての社会形成(Social Construction through Rituals)』という研究プロジェクトを例に取りながら、パフォーマンスについて私の考えを明らかにしたいと思います。このプロジェクトは、『演ぜられるものの諸文化(Cultures of the Performative)』という14の学際的研究プロジェクトを集めたドイツのCOEの中の一つとして、人文・社会科学系でこの種のものとしてはベルリンで初めてのものです。数年に渡りドイツ研究者協会(German Research Community)に財源を得ております。

私たちのプロジェクトが踏まえている前提は、これまで社会科学の領域では儀式のもつ負の影響については長らく認識されてきたものの、儀式のもつ生産的な性格については無視されてきた、というものです。中心となる仮説は、儀式無しでは人間社会の形成、維持、変化への対応はなしえないのではないか、というものです。プロ

ジェクトでは以下の諸項目に重点を置きながら研究をしております。

- パフォーマンス共同体としての家族
- 儀式の実例としての学校
- パフォーマンス媒体としてのテレビ、そしてメディア儀式による社会形成
- ジェンダーの狭間にて。幼児文化における儀式、身体動作、共同体

研究はベルリンの労働者クラスが住んでいる地区にある学校で行われています。子どもたちの年齢は10歳から12歳です。トルコ系、東欧系の子どもの割合が高い割合で混じっています。

では教育研究でパフォーマンスに焦点を当てることについての私の考えを説明する前に、このプロジェクトで私たちが焦点を当てた項目について紹介してゆきましょう。

—パフォーマンス共同体としての家族(Audehm/Zirfas)：ここでは私たちは4つの家族(両親と子ども二人；両親と子ども三人；母親と娘一人；ポーランドからの移民家族)の食事に関する儀式について研究をしています。中心となる研究課題は、家族そろって食事を取る時間とそれの儀式的性格が家族共同体の構成にとっていかに重要か、というものです。家族ごとに儀式のパフォーマンス的性質と様式は異なりますが、家族共同体の構成のために食に関する儀式が重要である、という点において全ての家族が一致しています。これは家族ごとに食の儀式が違っているのにもかかわらず、真実のことなのです。例えばある家族では、週日と週末とではっきりとした違いがあります。週日には台所で食事を取りますが、週末はダイニング・ルームです。ダイニング・ルームでは座る位置も違いますし、食事にかかる時間も長く、会話も込み入ったものとなります。儀式の身体的な面が食事の儀式ではとりわけ如実に出てきます。一つには食の儀式が肉体の維持と直接関わっている点でしょう。家族に交ざって観察をして明らかになったことは、行為の反復(同じ動作の繰り返しを意味するものではない)が儀式パフォーマンスがうまくいくための基本となっている、ということです。家族のメンバーがお互いを理解しうまくやっていくためには、食事時にどのように座るかもさることながら、食事中もしくは一緒に食卓に着いているときの会話がどのように展開するのか、ということも重要なのです。共に座っていること、食べていること、話をしていることを通して

家族共同体が現れ、食に関する儀式を遂行することによって家族の帰属意識が継続的に確認されるのです。

— 儀式の実例としての学校 (Göhlich/Schlöttke/Wagner) : 学校を儀式的組織とみなす研究には多くの面がありますが、私たちは移行という概念に集中して研究を行っています。私たちは、学校の児童がどのようにして幼馴染集団の状態からある学級の生徒へと変わるのか、クラスの先生たちはどのような儀式過程を使ってクラスを休み時間から授業時間へと移行させるのか、この移行の際に教室のドアが果たす役割ならびにドアと子どもたちの関りはどのようなものなのか、といった問いに答えようとしています。教室のドアは教室と学校のそれ以外の部分とを隔てる要素となっています。また休み時間に子どもたちは校庭や廊下に出ておりますが、そうした休み時間と皆が教室内部にいる授業時間とを分ける一助ともなっています。ドアの周りには境界状況が出現します。そこを通して休み時間から授業時間への移行がなされる敷居です。同様に、週末に過ごしていた幼馴染の世界から学校世界への移行が月曜日に行われるのか、私たちは関心があります。この移行にあたって、教師や児童は意識すること無しにどのような準備を行っているのでしょうか？この点について、教師と児童はある特定の状況である決まった儀式的な振る舞いをするを内面化し、また互いに協力してやっていることが観察されています。

— パフォーマティヴィティ媒体としてのテレビ、そしてメディア儀式による社会形成 (Constanze Bausch, Stephen Sting) : この研究グループはテレビ視聴に関する儀式よりも、10歳から12歳といった、子ども時分での行動形態やパターンからティーン・エイジャーや思春期の行動形態やパターンへと移行する年頃の子どもたちに、テレビがどのような影響を与えているか、という問題により焦点を当てています。この時期テレビに映る画像がどういった役割を果たすのか正確に知るため、私たちはビデオ機材使用法のクラスを開いて子どもたちにビデオカメラの使い方を教えました。そして子どもたちがゲームで遊んでいるところを子どもたち自ら録画するのです。またこの模様自体も別の場所に仕掛けたカメラで録画します。この実験を始めてすぐに明らかになったことは、子どもたちはいつも見ているテレビ番組について非常に詳細な知識をもっており、その番組が発するイメージが子どもたちの内面世界におけるイメージ群の一部となっている、ということでした。こうしたテレビ番組には広告もあり、トークショーもあり、シリーズモノもあります。子どもたちに何か自分たちで演じるように言うと、

子どもたちは皆が共通してテレビから得ているイメージを探り、何かやる上でのモデルとして使ったのです。少なくとも彼らがメディアについてやる際にはそうでした。私たちが観察したあるケースですが、子どもたちは防臭スプレーのテレビ広告を例として援用し、それをお尻のスプレーに換えることで自分たちのパフォーマンスを作ったのです。そうやってその広告と自分たち自身とをからかって遊んだのです。あるいは自分たちで大好きなポップ歌手たちの物真似をし、実物と似てないところを笑い転げながら遊んでいました。若者文化にあるこうしたモデル群は魅力的なのです。子どもたちをしてもう子どもではいたくないという気にさせ、その代わりにそうしたモデルのようになりたい、見られたいと思わせるのです。何かを演じるということについて極めてはつきりしたことは、自分が何かする中で援用されるそうしたモデル・イメージの模範的・志向的性格でした。

— ジェンダーの狭間にて。幼児文化における儀式、身体動作、共同体 (Teervoren) : この研究で調べているのは、学校児童が儀式の遂行も含んだパフォーマティヴィティ過程を通じて、いかにして自己のジェンダー・アイデンティティーを発見し、それを他者と行為を共にすることによって確認するのか、という点です。

ジェンダー・アイデンティティーは品行によって理解されます。このようにジェンダーを広く解するといろいろな可能性が出てきます。私たちが行った学校の日常観察と件のビデオ機材クラスの結果、男女別差異を示す資料がたくさん集まりました。例えば男の子たちですが、女の子たちがよく使う防臭スプレーを悪用して遊んで女の子たちから距離を置こうとしました。また男性を示すジェンダー・アイデンティティーを儀式的に見せる場合に、トルコ系の男の子たちとドイツ系の男の子たちの間にかなりの違いを見ることもできました。女の子たちもジェンダー・アイデンティティーにまつわる儀式をやっているのを見ることができます。例えばよく女の子たちはテレビで見るモデルに触発された振る舞いをしております。モデルとする人物と似たようなメイクをし、その人たちの曲をかけ、振り付けを真似して踊っています。このことは生徒企画週間に催された「リトル・アメリカ」というパフォーマンスにはつきり表れました。ある有名ポップ・グループの真似をして、女の子十人が特別に高く設えられたステージの上で振り付けを合わせながら全校生徒の前で踊ったのです。私たちの観察によると、この年頃の子どもたちにはジェンダー・アイデンティティーの探求があらゆる学校活動の中で重要な役割を果たしている、ということが見受けられます。このプロセ

スでは、ジェンダー・パフォーマンスの儀式化が新しい共同体行為の習練に寄与しており、これによって不安が克服されていっているのです。

研究方法

それでは儀式のパフォーマティヴィティとはどのようにして研究されうのでしょうか。これなら、という方法があるわけではないので、この問いに答えるのは簡単ではありません。そこでプロジェクトの一部に研究方法の開発も入っているわけです。もちろん、すでに試してみた方法もあります。私たちはこの研究で特に社会的レベルでの上演とパフォーマティヴィティの形態に関心を抱いており、そうした範囲ゆえに方法上の焦点を、参加型観察に置いています。この方法は主に4つに分類されます：

- 一人もしくはできれば二人の研究者が行う参加型観察
- 音声に基づく参加型観察
- 写真に基づく参加型観察
- ビデオに基づく参加型観察

私たちが関心をもっているのはパフォーマティヴィティであり、これを行動主義で謂うところの行為と同等待視することはできません。そこで私たちは、特定のシーンや上演形態の設定ならびにパフォーマンスに含まれている想像上のプロセスについても何か解れば、と希望を抱いています。さらに私たちは行為者が自らの上演に下す自己評価についても関心をもっています。実際この点はイメージを扱うことやイメージを記録することの限界をのり超えてゆくために重要なのです。イメージについては、ともすれば目立たなかったり雑多な解釈が与えられたりしがちですが、行為者の自己解釈を知ることによって明快になるものです。この点について資料を得るために以下の方法を用います：

- 特定のトピックについてインタビューを行う
- グループ討議

この両点からは異なった資料が上がってくるもので、それらはイメージに基づくデータに当て嵌められねばなりません。グループ討議からは、行為者の想像力と特定の行為にあるパフォーマンスとの関連について有用で新しい洞察が得られ、個人もしくはグループによる特定の行為についての理由が明らかにされるものです。

既に述べたように、パフォーマティヴィティでは言葉

によって為されるある種の行為ならびに社会的状況下での身体的な行為・創造・パフォーマンスの両方が描写されます。それゆえにイメージに基いた研究方法と言語に基いた研究方法の両方を合わせる必要があるのです。全ての研究方法には何らかの利点・欠点があります。例えば社会的出来事をビデオで録ることに明確な制限があります。一つには、カメラの角度によってその出来事に関する私たちの見解が決まってしまうことでしょう。またあるいは、出来事の3次元的性質はビデオ上に移し変えられる過程でいつもどこか歪められてしまうものです。ですからカメラの前で実際に起こることと、後からそれをフィルム上で見たものとは全く一緒ということとは決してありません。とはいえ、ビデオを使う最大の利点は、ある場面を繰り返し見て分析できることです。これは特に社会的行為を微細に分析する場合に、とりわけ価値ある利点となります。

研究方法の観点からはまだ多くの問題が残されています。社会科学的写真ならびにビデオ録画の図像学について研究してみるのは非常に価値のあることです。ここで扱われるべきは、想像上のイメージと社会的行為との関係、写真とビデオとの関係、イメージと文章との関係、イメージの歴史的配列のパターンとその状況別適応との関係などといった問題です。

全ての民俗誌学的方法でミメティック・プロセスが重要となります。参加型の観察ならびに音声もしくはビデオを基にした観察では、ミメティック・プロセスを援用することによって観察下の行為や状況と観察者とその観察記録とを比することが出来ます。実際、観察の質は大筋においてこのミメティックな関係によって決まるものです。観察者が自己から離れ観察している状況に溶け込んでゆけばゆくほど、観察者の立場は良好なものとなり、ますますの観察ができるでしょう。その一方で、観察者が我見や分別に囚われていればいるほど、観察される側の人間や状況へのアプローチが難しくなり、結果的にその参加型観察の信憑性は損なわれるものです。事実、参加型観察の質は観察者のミメティック性の資質によって保証される、とみなすことができます。

方法論的観点から云いますと、三角測量的な方法使用は手段のうちで重要なものであり、これによって民族誌学的研究とその結果の複合性が高められます。三角測量的に用いるとは、ある同じ状況を二つかそれ以上の方法を用いて調べることです。例えば参加型観察にビデオ主体の観察を組み合わせたか、とかその結果をグループ討議の結果とつぎ合わせたりとかです。こうした手順の中心となるものは、同じ状況についての異なるデータを比

較することにあります。この方法によって理論に有効性が出てくる可能性が高まります。

パフォーマンスティヴィティの諸相

もしパフォーマンスティヴィティが教育科学研究の焦点となるならば、私たちは関連する諸概念の主要局面について綿密な考察を施さねばなりません。そこで次に儀式の分野に関するもので、研究で特に大切なパフォーマンスティヴィティの諸相を6つ取り上げようと思います。

身体 (Corporeality)

儀式をパフォーマンスティヴィティの観点から考察するにあたり、最初に言及しておくべきことの一つは儀式とは何はともあれ身体的行為であるということです。儀式は身体をもって挙行されます。このことはパフォーマンスの身体的側面に特に注意を払い、儀式がどういった特別な身体的所作で執り行われるか注目すべきことを意味します。ここでまず明確にされるべきは、身体についてどういった概念をもってその研究は行われているのか、です。この点大いに関係してくるのが、歴史的側面を考慮することと、儀式に身体を取り入れることについて異なった着想同士を比較することです。例えば食に関する儀式について云えば、食べ物があった姿勢で、座った姿勢で、あるいは寝そべった姿勢で摂られるのかどうか注目することができます。加えて姿勢の違いについては、文化的側面から理解を深めることができます。文化的側面から、例えば食べるときに通常どんな状況で私たちは座っているか、立っているか(例：ファースト・フード)、または寝ているか(例：病気のとき)、そしてこれら異なった姿勢が食の儀式の遂行にそれぞれどのような影響を与えるのかについて説明できます。また食の儀式は、食事の摂られるのが親密な文脈なのか、社交的文脈なのか、公的な文脈なのかによっても変わってきます。例えばキャンドルを灯しての親密なディナーよりは公的な場面の方がしきたりが重要となってきますし、一方で立食形式の歓迎会にはまた別の儀式的要件が関わってきます。

儀式がうまく遂行されるためには、個々人の身体的な所作およびそれが他の参加者とどのように関わっているかが決定的に重要となります。なぜならこの身体的側面が儀式のパフォーマンスティヴィティを担保するものだからです。儀式の重要な性格、すなわち儀式の共同体を創出する面ですが、これは儀式の身体性および物質性と密接なつながりをもってしています。パフォーマンスティヴィティの身体性如何で、参加者は儀式的場面について様々異なった

解釈を下すかもしれませんが、そうした解釈の違いは儀式のパフォーマンスと評価についてそれほど意義あるものではありません。実際、儀式にとって決定的となるのは参加者が同じ解釈を共有することではなく、集団でパフォーマンスすることなのです。

こうした文脈の中で私たちが身体について話すとき、念頭にあるのは何かある特定の社会や文化に刷り込まれているものとしての身体概念、何か社会的・文化的プロセスの中で形成されてきた身体概念、そして何かそれ自体が同時に社会的・文化的プロセスを創り出すものとしての身体概念なのです。これらのプロセスはブルデューが習慣の創造・維持・変容に関して描出したところの言葉をもって捉えられます。

演出されたパフォーマンス (Staged performance)

パフォーマンスティヴィティ研究にとって身体は以上のように中心的重要性がありますが、この重要性から次に注意を払うべきは、社会的な状況が組織化されまた他者との関係性が作られる意図的な脚色です。ある決まった関係性が生み出され、またその質も特定されるのはこうした脚色においてです。人は自分を見せるときに背景の中に置いて見せ、またこうした背景を伴う見せ方はいろいろな受け取られ方をする、という事実は疑いの余地がありません。いろいろ異なった身体的配置や背景設定をもって、私たちは自分が何者であるのか、そして他者やこの世界とどのような関係性を有しているのか、といったことを示します。こうしたプロセスの多くは無意識的なものですが、意識的になされるものや意図的に創られる場合もあります。

学校の授業中に行われていることも、教師と児童が異なった役を演じている背景付パフォーマンスとして理解できます。私たちの研究では、授業中いかに補完的あるいは対立的に演出された行為の数々が重層的に入り組んでいるか、ということが明らかになりました。教師と児童とでは目的とするところも違えば表現するところも演じる場所も違いますので、そうした違った層がしょっちゅう隣り合って同時に存在するのです。もっとも、演出されたパフォーマンスの中には突発的なものもありますが、それがなぜその特定の瞬間に出てきたのか正確に語る術はありません。他の演出された行為についてはもっと簡単に説明がつきます。それらは児童あるいは教師の行為において、ある特定できる展開があったところから発生してくるのです。こうしたプロセスでは異なった背景間で生ずる偶発性が重要となってきます。ですから、あるパフォーマンスはある特定の形をとるわけ

ですが、別の形をとることもありえたわけです。このように偶発性の概念には遊びの要素があるわけですが、これゆえにこの偶発性という言葉は演出されたパフォーマンスのプロセスを考える上でとりわけ適した言葉になると私は思っております。この偶発性を用いながら背景設定された行為を理解するならば、身体的パフォーマンスを因果関係や最終因に還元してしまうことを防げますし、もって突発性や遊びといった重要な面について考察する余地も増してくるわけです。

ジェスチャー (Gestures)

あらゆる身体的パフォーマンスが演じられる上で、ジェスチャーの果たす役割は必然的に大きいものがあります。ジェスチャーとは話し言葉によらない表現の形態です。ジェスチャーを伴わない会話というのは殆ど無いわけですし、ジェスチャーによって表現されたり表されたりせずに感情が表に出てくるといってもまず無いわけです。ジェスチャーは重要な身体動作と解されており、身体による最も重要な表現形態の範疇に数えられます。ジェスチャーが感情や意思の身体的一象徴的表出を代表するものである限り、ジェスチャーは個人の社会化ならびに共同体や社会の創出・組織にも関与しているのです。社会的な状況ではジェスチャーは意味を創り出す方途であって、これによって個々人はお互いに接触をもったり理解しあったりするわけです。ジェスチャーによって気持ちや社会的関係が表現されるわけですが、こうしたことについてジェスチャーを行っている本人も、またジェスチャーを受け取ったり反応したりする人も気付いてないことが結構あります。

ジェスチャーは話し言葉を伴ったりしますが、にもかかわらず話とは直接関係無しに「それ自身の魂」といったものをもって見えます。話される内容の特定の面について強調したり相対化したり、あるいは矛盾したり疑問を投げかけたりして、ジェスチャーはいろいろな仕方言葉で言葉を補完するメッセージを伝えているのです。ジェスチャーで表されることの方が、口から出る言葉よりも話者の気持ちにより密接に関っている場合がよくあります。言葉は得てしてジェスチャーよりも意識的にコントロールされますので、ジェスチャーの方がその人の内側を表す上でより信頼のおける表現だと考えられます。

ある人々やグループと親しくなれるかどうかは、ジェスチャーにどれだけ通じているかによります。人はあるジェスチャーがどういった意味をもつものなのか、どう受け取るべきなのか、どう反応すればよいのかについて

知っておらねばなりません。ジェスチャーによって人間の行為が計算できるものになります。広義に云って共同体のメンバーはボディ・ランゲージを通してコミュニケーションを図りますが、ジェスチャーはその一部をなしているのです。こうなるとジェスチャーは、個人が社会化を通して獲得し、個人の行動を適宜なものに制御する上で大切な役割を果たす、社会的知識の領域に入ってくるのです。

ジェスチャーを通して、能動的な主体が単に身体内に存するという立場から出て、それ自身も身体をもっているということが示されるわけですが、これがパフォーマンスティヴィティの一つの中心的特質であります。ここで関連する前提条件とは、人間の「風変わりな命題」、すなわち人間は動物とは違って単に存在するのではなく自らから抜け出して自らについて言及するものである、という事実です。人間の想像力、言語、ジェスチャーはこの「風変わりな命題」によって説明されるものです。

複雑性 (Complexity)

儀式的パフォーマンスはしばしば曖昧であります。儀式的パフォーマンス内では異質あるいは矛盾した意図が重ねて出されたりするのです。芸術作品に似て身体的パフォーマンスにはいろいろな意味が込められ過ぎて、ある一つの単純な意味に還元することはできません。ある制度についてその機能や役割を明らかにしようとするほど、身体的パフォーマンスが有する多面的で曖昧な性質の問題に悩まされるものです。そこで学校が子どもたちの資格・選別・認知に関する限りにおいては、学校側は儀式的パフォーマンスを実際可能である以上に単純に想定するものです。ですから、パフォーマンスティヴィティにあてられた研究が身体的パフォーマンスの多面性や曖昧さを明らかにするという事は、とりわけ大切なことなのです。これによってパフォーマンスティヴィティの複雑性に光が当てられるわけですから。

この複雑性の一部には、パフォーマンスティヴィティに機能的な解釈を与えることの限界を描出することが含まれています。人間の社会的行為というのは、アングロサクソン系の社会人類学でよく想定されているほど、単にその役割や機能を認識することで正しく説明されはしないのです。社会的パフォーマンスには、特定の機能の完遂ということに還元され得ない表現や表示が含まれているのです。表現や表示はそれ自体が目的であります。それらの美学的特質はミメティックなプロセスによってのみ適切に説明されうるのです。

ミメシス (Mimesis)

儀式的パフォーマンスティヴィティとその他の身体的パフォーマンスは、ミメティック・プロセスを必要とします。ミメティック・プロセスは人々が儀式的パフォーマンスに参画する際に関ってきます。ミメティック・プロセスとは創造的模倣のプロセスのことで、必然的にモデルがあってその上に成り立っています。このプロセスにおいて、ミメティックに振舞っている人はそのモデルのようになることを欲します。このコピーないしようになるというプロセスは、ある人物が身体的にそして社会的に自分自身をどう演じるか、つまりこの世界・他者・自分自身にいかに関係しているか、といったことに関係しています。そして自分以外のものをユニークにしているものと関連してきます。あらゆるミメティック・プロセスの内に横たわっている志向性は、この自分以外のものに向けられているのです。ミメティック・プロセスには個々人が含まれるだけでなく、いろいろな形態のパフォーマンスティヴィティが関係してきます。そうした中には、いろいろな慣例が遂行者の身体に具現化され確立される儀式も含まれているのです。

ミメティック・プロセスの意義は、教育においてまず強調され過ぎることが無いほど重要なものですが、殆どの場合知らず知らずのうちに執り行われています。ミメティック・プロセスは感覚的なものであり、それゆえにとりわけ人間の行為のパフォーマンスティヴィティと関連するのです。人はミメティック・プロセスを通して社会的パフォーマンスのイメージを内面化します。こうやって取り込まれたものが、その人の内面にあるイメージと概念の世界の一部となるのです。別の言葉で言えば、ミメティック・プロセスによって外側の世界が内側の世界へと交換されるのです。そうやって人間の内面世界の拡張に寄与、すなわちミメティックに行為する人の発展を強調します。またミメティック・プロセスによってある特定の実用的知識も得られます。この知識はまず身体的パフォーマンスの文脈で展開してくるもので、身体的パフォーマンスを新しい方法で演出していく上で重要な役割を果たします。実用的な形としての知識ですからパフォーマンスティヴィティをミメティックに処理したその結果なわけなのですが、そのパフォーマンスティヴィティのミメティックな処理自体、身体から得られた実用的なノウ・ハウより行われているのです。

このように実用的知識とミメシスとパフォーマンスティヴィティは交錯しているのですから、反復ということが重要になります。パフォーマンスティヴィティは行為が反復されその反復の中に変化する場合においてのみ立ち表れ

てきます。反復ないし現在あるいは過去の何かをミメティックな意味で参照すること無しには、パフォーマンスティヴィティの能力というのはありません。それゆえに反復というものが教育や儀式における重要な側面となるだけでなく、ミメティック・プロセスおよび身体動作においてつまりパフォーマンスティヴィティにおいて一根本的な役割を果たすのです。

権力 (Power)

パフォーマンスティヴィティは権力の問題と密接に関わっています。あらゆる身体的パフォーマンスは特定の場所で発生するもので、始りと終りがある、つまり特定の時間と空間が配置されているのでして、なおかつ他の人々との関係性を作り出す場合もよくあるものです。パフォーマンスティヴィティの形態の違いというのは共同体と社会の経済的・政治的・社会的条件によって決定されるものであり、ゆえに特定の権力構造の中にはめ込まれているのです。人々の共同体観・社会観・世界観・宇宙観は身体の儀式化によって形成されます。身体の儀式化によって社会秩序が作られ、そこから経験の認識・情動面が形成されます。これで人はこの世界が「本当」であるとか「自然」であるとか、規定したり経験したりできるのです。そうした認識のプロセスにあるメカニズムやパターンに気付くことなしに、「きちんと座り直せ」などといった文では、一見意味の無い公式の中に、ある特定の教育的格言に従えという断固とした要求が匿われているのです。こうした公式自体はささいなもののようにも思いますが、それを言われた子にとっては精神の奥深くへと効果が及ぶのです。なぜなら、ここで取られたコミュニケーションというのは、ただある人に特定の姿勢を取れといったものではなく、特定の価値観やものの見方を含んだ社会的態度を問題としているのですから。こういった要求の儀式化によって、取るように言われた姿勢と結びつけられた態度や価値観が内面化される、という結果が生じます。身体的パフォーマンスを行うことによって、言語、イメージとリズム、文化的空間、時間の使い方についての指示が出て、それらが合致できるのです。身体はある種文化のメモリー・バンクとなるのです。規範・価値・スキーマ・全体計画が一つにまとめられるのです。このように身体がパフォーマンスティヴィティに基づいて構成されることを通して、身体と身体自身との関りようが決まり、身体の地理的展開があり、その結果として性的な働きを分かちパターンが、すなわち性的な働きの分別というものが内面化されるのです。

将来的見通し (Outlook)

私はこの場でパフォーマンスティヴィティの重要な面を全て扱うことができたわけではありません。例えばそれを通して共同体形成が行われるパフォーマンスティヴィティの形態の問題については、さらに注意が払われねばならないでしょう。問題となっているのは、共同体がプロセスとして考えられうるのはどの程度までなのか、共通行為を通じて出てくるものは何なのか、パフォーマンスティヴィティの結果は何なのか、共同体という概念の限界は正確にどこにあるのか、といった問いです。さらに考察されるべき問いとして、パフォーマンスティヴィティは正確にどのように発生するのか、というものもあります。この問いについては、ミメシスを通して獲得される身体的知識が重要な役割を果たすことに疑いはありません。そこで私はパフォーマンスティヴィティが色々と異なったパターンで創出そして形成されることについて、イメージ・想像物・想像力に基づく人間の内面世界に非常に大きな意義が与えられるのではないかと、思っています。躰や教育にて想像力が中心的役割を果たしていることを、パフォーマンスティヴィティは指しています。よって、想像力についての包括的知識が得られるとパフォーマンスティヴィティをより理解できるのではないかと、云うことができるでしょう。

参考文献

- Berg, E./Fuchs, M.: *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1993.
- Bohnsack, R.: *Rekonstruktive Sozialforschung*, Opladen: Leske&Buderich 1999.
- Bourdieu, P.: *Méditations pascaliennes*, Paris: Éditions du Seuil 1997.
- Bourdieu, P.: *The Weight of the World: Social Suffering in Contemporary Society*, Oxford: Polity Press 1999.
- Bourdieu, P.: *The Logic of Practice*, trans. Richard Nice, Cambridge: Polity Press 1990.
- Bourdieu, P.: *Sozialer Sinn*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1987.
- Bourdieu, P./Passeron, J. C.: *Grundlagen einer Theorie symbolischer Gewalt*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1973.
- Bourdieu, P.: *Esquisse d'une Théorie de la Pratique, précédé de trois études d'ethnologie kabyle*, Genève: Droz S. A. 1972.
- Clifford, J./Marcus, G. E.: *Writing Culture*, Berkeley/Los Angeles: University of California Press 1986.
- Csiksentimihalyi, M.: *Flow-Erlebnis*, Stuttgart: Reclam 1985.
- Denzin, N. K./Lincoln Y. S. (eds.): *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks: Sage Publications 1994.
- Dilthey, W.: *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*, Vol.7, Stuttgart/Göttingen 1958.
- Dilthey, W.: "Die Entstehung der Hermeneutik" in: Oppolzer, S (ed.): *Denkformen und Forschungsmethoden in der Erziehungswissenschaft*, München 1966, 13-24.
- Featherstone, M.: *Undoing Culture. Globalization, Postmodernism and Identity*, London: Sage Publications 1995.
- Gebauer, G./Wulf, Ch. (eds.): *Praxis und Ästhetik*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1993.
- Gebauer, G./Wulf, Ch.: *Mimesis. Kultur - Kunst - Gesellschaft*, Reinbek: Rowohlt 1992; *Mimesis. Culture-Art-Society*, trans. Don Reneau, Berkeley/Los Angeles/London: California University Press 1995.
- Gebauer, G./Kamper, D./Lenzen, D./Mattenklott, G./Wunsche, K./Wulf, Ch.: *Historische Anthropologie. Zum Problem der Humanwissenschaften heute oder Versuche einer Neubegründung*, Reinbek: Rowohlt 1989.
- Geertz, C.: *The Interpretation of Cultures*, London: Fontana Press 1993.
- Geertz, C.: *Works and Lives: The Anthropologist as Author*, Stanford University Press 1988.
- Geertz, C.: *Further Essays In Interpretative Anthropology*, New York: Basic Books 1983.
- Geertz, C.: *Dichte Beschreibung. Beiträge zum Verstehen kultureller Systeme*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1983. Göhlich, M.: *Die pädagogische Umgebung*, Weinheim: Deutscher Studien Verlag 1993.
- Goffman, E.: *Frame Analysis. An Essay on the Organisation of Experience*, New York; Harper and Row 1974.
- Grimes, R.L. (ed.): *Readings in Ritual Studies*, Upper Saddle River, New Jersey: Prentice Hall 1996.
- Grimes, R.L.: *Research in Ritual Studies*, Metuchen, New Jersey: Scarecrow Press and the American

- Theological Library Association 1985.
- Hartmann, D./Janich, P. (ed.): *Methodischer Kulturalismus*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1996.
- Hitzler, R./Honer, A. (eds.) *Sozialwissenschaftliche Hermeneutik*, Opladen: Leske&Bederich 1997.
- Iser, W.: *Das Fiktive und das Imaginäre. Perspektiven literarischer Anthropologie*, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1991.
- Jessor, R./Colby, A./Schweder, R. A. (eds.): *Ethnography and Human Development*, Chicago/London: the University of Chicago Press 1996.
- Kamper, D./Wulf, Ch. (eds.): *Logik und Leidenschaft. 12 transdisziplinäre, internationale Studien zur Historischen Anthropologie 1982-1992*:
- Krüger, H. -H./Marotzki, W. (ed.): *Handbuch erziehungswissenschaftlicher Biographieforschung*, Opladen: Leske & Buderich 1998.
- Liebau, E./Miller-Kipp, G./Wulf, Ch. (eds.): *Metaphoren des Raums. Erziehungswissenschaftliche Forschungen zur Chronotopologie*, Weinheim: Deutscher Studien Verlag 1999.
- Liebau E./Wulf, Ch. (eds.): *Generationen*, Weinheim: Deutscher Studien Verlag 1996.
- Markus, G. E. (ed.): *Rereading Cultural Anthropology*, Durham/London: Duke University Press 1992.
- Morin, E.: *La complexité humaine*, Paris: Flammarion 1994.
- Morris, D./Collett, P./Marsh, P./ O'Saughnessy, M: *Gestures. Their Origins and Distribution*, London: Jonathan Cape Ltd. 1979.
- Paragrana. Internationale Zeitschrift für Historische Anthropologie*, 7 (1998) 1: Kulturen des Performativen; 4 (1995) 2: Mimesis-Poiesis-Autopoiesis, Berlin 1995.
- Rivière, C.: *Les rites profanes*, Paris: Presses Universitaires de France 1995.
- Schäfer, G./Wulf, Ch. (eds.): *Bild-Bilder-Bildung*, Weinheim: Deutscher Studien Verlag 1999.
- Schechner, R.: *Between Théâtre and Anthropology*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press 1985.
- Schmitt, J.-C.: *La raison des gestes dans l'Occident médiéval*, Paris: Gallimard 1990.
- Todorov, T.: *Nous et les autres*, Paris: Éditions du Seuil 1989.
- Turner, V.: *From Ritual to Theatre. The Human Seriousness of Play*, New York: PAJ Publications 1982.
- Turner, V.: *The Ritual Process. Structure and Anti-Structure*, New York: Aldine Publishing Company 1969.
- Wagner, H.-J./Wulf, Ch. (eds.): *Vom Menschen. Handbuch Historische Anthropologie*, Weinheim/Basel: Beltz 1997.